



雜錄

新年と家庭

明治三十四年の春は來りぬ。悠々たる天地鼓腹せる萬民、孰れか聖代太平の徴にあらざらん。

九重の雲深き邊は申すも畏し。昨日までも其日々々を過すに思ひ煩ひたりし賤が伏屋に至るまで、今日は軒ごとに吹き翻へる國旗の影に一家團聚治る御代の恵を仰ぐぞ、めでたき。

吾人は茲に始めて讀者諸媛と本誌上に相見へて、共に此太平の新年を祝するを得るに至れるを喜び、併せて一言以て新年の辭を述べんと欲す。蓋、年改るといひ、世紀變れりといふといへども、つらく観ずれば、つまり、人間一生の生活の連鎖に想像的に一線を劃せし段落に過ぎず、極言すれば、年の改まると共に

吾人は寧實に墓前に近づきつゝあるなり。是を以て、古は戸毎に立て連たる門松を見て冥土の旅の一里塚と歎せし厭世家もありしなり。

吾人は實に年とともに老に近づき年と共に墓前に進ひを知る併れども吾人が幾多の満足を以て去歳を送り更に幾多の希望を以て新年を迎うる所以のものは、この一生の一段落と共に、吾人のまさに盡すべき義務、吾人のまさに爲すべき仕事をなすつくりたる段落を感じし、更に其以上に向つて一步を進むるを覺ゆればなり。新年を迎へて吾人の墓前に進むを悲しまずして反つて之を祝する所以は實にこれがためなり。

かくの如くにして新年は實に吾人生活の元氣を新にすべき一段落を與ふるものなり。是を以て、新年を迎へて吾人のまさになすべし所は、徐に過去一年中に於ける吾人の行爲、仕事成績の總額を熟察し、更に本年中に於ける幾多の希望を進め、一段の理想を高むるにあり、一年中家庭の温情を外にして、わけくれ學の窓

に餘念なかりし子女たちも、日々繁忙なる家業に執掌して逸すくなかりし家父君たちも共に集りて一堂の内に會す。父母兄弟姉妹相集りて互に一年中の成績を語り合ひ、互に來れる年に於ける祝福を祈るこれ確に年と共に吾人の理想に近づくべき良法にあらずや。かくて以て一堂に喜嬉遊樂す、かくの如くにして和樂せし新年の家庭は實に過去一年中の仕事を一洗し新らしき生活の元氣を生じ來らしむるものにあるなり。

吾人は、切に本誌上に於て諸子諸媛の本年中に於ける、幾多の希望と理想と祝福とが皆ともに現實にせられんことを祈る

正月の餅

門松は立てずとも、春を迎ふるものはあらん。餅を食はずして、年を重ねるものはなかるべし。こは、あながち口腹の慾によるといふべからず、まさしく神明の

を敬ひ祖先を尊び一家團欒、以て新歲を賀し、又、各々の健康長壽を祈るにあるなり。本邦自古以來餅爲神明之供一而作大圓塊以擬鏡形一故呼餅稱鏡此擬三入咫鏡一于正月朔旦必以三鏡餅一供于諸社一及一家長幼團欒同薦鏡餅一以賀新歲一凡用二鏡餅一祝賀儀以三箇相重號二重一此諱奇用偶才乎。本朝食鑑又、歲首に餅を製て鏡餅と稱ふること日神磐戸にこもらせおはしけるとき其御象鏡に鑄奉りて祈申けるに再び磐戸明させ給ひしといふ佳例にとりて、新玉の年立歸る春の初を、かの常闇より又しもうつゝに開け明ぬる嘉慶になんたぐへつゝ祝ひける。成形圖既又、はがためとでもちひ鏡にむかふ事は、いかなる故ぞや(答)人は齒を以て命とするゆゑ齒の字をよはひともよむなり、齒齒はよはひをかかたむるなり。世諺問答などいへることあり、以て證すべく又永く例とすべし

言はでものこと

△吾一日、小間物店にて、石鹼を購めんとて、彼れ此れ、見比べつゝありしに、やがて七歳か八歳ならん、幼女の、倉皇しく、駈けきたりて

くださり、おしろいをください、主婦は

おしろい？ 何はぞ？

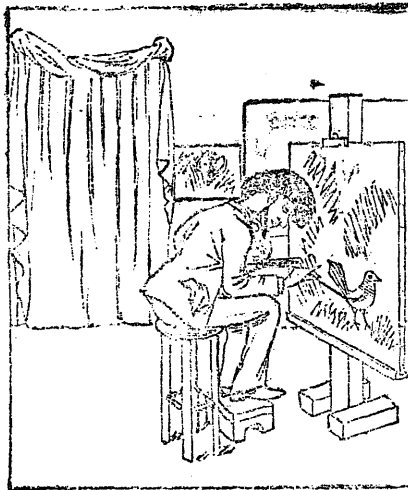
と答へしに、幼女は、白銅貨をにぎりたる、少き掌を擴げ、満面

笑みを堪へて、

私し、今日ね、しばやへ行くの、劇場以下は、言はでものことなり、

△或小學校教師、次の如く語りさ

日朝の授業前に、吾運動場に出で、嬉戲せる兒童を、看護しつゝありしに、或る時、尋常科第三年級



なる幼女駈け來りて、嬉しげに、吾の手を握り先生お早う

わたしの、おつかさんの、おなかは、こんなよと腹の上に兩手を張りて、大鼓の如くにし、やがて口を開きて笑ひぬ

おつかさん以下は言はでものことなり

△余の姉語りて曰く我家に親しく往來せる、山田といふ、大學生あり、垢面弊衣、而かも獨り長談を縦にして底止する處なし、されば彼を嫌惡すどにはあらねど、自ら彼の

來訪の屢々ならざらんを希ふに至り

ほんとに、あの人は仕方がない、きたない着物を

着て、長ツ尻で、

と彼の歸りし後に獨り言つことも問々ありき

一日彼の來りて、例の如く、茶菓を介みて、閑談の最中、六歳なる我幼兒、賢しこげに

山田さんがくると、おつかさんは、いやだつて、

きたなくつて、おまけに長つ尻だから、おつかさん、いやだつてさ。

と、彼の苦笑して、何とも答へざるを怪しみ、吾に賛同を求めんとてや、さらに顔を我方に向けかへし

ねー、おつかさん

誠に、言はでものこを言ふものかな、

△名は逸したり、誰やら余に語りて曰く

十歳 腕白息子をもてる母、或日到來せる菓子折を佛壇の下に秘め隠せる後、傍らに纏はり居たる五歳の幼女を戒めて曰く

兄イさんが、歸つても、佛壇の下に菓子が入れてあると云ふんではありませんよ、おまへにあげるんだからね、決して云ふんではありませんよ、兄イさんは、みんなぬすんで喰べてしまふからね、

いいかい、
幼女はうなづきて

あい、あい、

やがて、遊びに倦みて、歸り來れる兄を認め、幼女は

おつかさんが、佛壇の下に、菓子が入れてあるなんて云ふなつて、みんな兄イちゃん、盗んで食べてしまふから、

誠に情なきことを言ひ出すものなり

富豪の美擧

前には平沼氏の貧民學校を、横濱に立てたるものあり、次に大倉氏の、商業學校を、東京に立てたるあり。近來又、住友家には、巨萬の資を投じて、大坂に、圖書館を創立せんとす云ふ。近來、我國の富豪が、公益のために巨資を投ずること、漸く、多きを加ふる

に至れるは、頗る、喜ぶべきことなりと、いふべし。
 吾人は、更に、目下の状況を見て、東京市内に、完
 全なる幼稚園と、之に附屬せる、保姆養成所とが、之
 等富豪の手によりて、創設せらるゝを、望むや切なり。

家庭保姆養成の必要

両親たる者、如何によく、其子
 供に注意すればとて、乳母或はお
 附たる者にして、幼児教養の心得
 なき時は、折角の心盡しも、何の
 甲斐なかるべきなり。我國にて、
 中流以上の家庭にありては、其子
 を、幼稚園へ送る、送迎より始め、朝夕、幼児の起
 居萬端、皆、此乳母或はお附に、一任せるものなるに
 不幸にして、彼等には、少しも教育を受けざる者ある
 のみならず、人の大切の子を世話するに必要な育児



に關する知識すら、全く、皆無にてあるなり、是を以
 て、例令ば、學校幼稚園な迄にて、折角、幼児に、善
 良なる習慣を養はんとしても、彼等の不注意なるが
 ため、間々、一日温めて百日冷やすが如き結果に至る
 ことあり、或は、尙年少のお附等
 に在りては、たい／＼自分等の面
 しろさを考へるより他には餘念も
 なく、ために随分、乳暴を子供に
 仕向くる等のことあり。かくては
 如何に親たるもの、教師たるもの
 が、注意したればとて、何の効も
 なきことゝなるべし。

近來、某所にては、既に、下婢
 養成の學校を設けたりと聞けり。吾人は更に、育児、
 衛生等を心得て、完全に其職を盡し得べき、乳母お附
 等を養成する學校の設立せられんことを望む。

言葉の遣ひ方

言葉の遣ひ方は日常、人と交際上、最、注意すべきものの一にして、たとひ心にもなき世辭をふりまかす

ども、言ひ廻はし方によりては、随分、人の感情を和らぐるを得べきなり。獨乙の或書物に左の如き面白き話の見えたれば譯出しぬ。

昔、土耳其國の或王、一夜の中に、悉く、其齒の落ち失せたる夢を見しかば、兎角に、思ひ煩ひたる末、遂に夢占者を召して占はしむる事にしたなり。占者謹んで申す様、殿下、臣は偏に殿下の玉體に災なからん事を望む、御夢の意に依れば、殿下は、殿下の、王族の悉く御逝去あらせらるるを見んしと。王は此不祥の判断を聞てし召されて甚く逆鱗あらせ



られ即座に杖一百の罰に處し宮中より追放ち玉ひ、更に他の占者を召さる。占者、乃、謹んで奏する様、「殿下よ、上帝、殿下の爲に、此上なき幸福を賜はん御夢の心によれば、殿下の王族、悉く長生せられ

殿下は然も、其最後まで長生せらるべし」と。王甚だ、満足に覺し召され、即座に御手許より金若干を賜はり、尙厚く彼を待遇せられたり。然れども、此二人の占者は、つまり全く、同一の事を奏上せしに留まるのみ。我國にては、古來口は、禍の門なと稱へて、言葉を以て充

より、いまに於て多辯を以て、あたかも不徳の一で、もあるかの如くに考へ居るものすくなからず。故を以て小學校、高等女學校に於ても書物を讀ましめるとか、

作文を作らすことは、甚しく獎勵して居ながら口語を以て充分完全に思想を發表することを勉めざる傾あるは、甚、怪しむべき次第といふべし。特に女學校等に於て禮式とか作法とか茶の湯生花とかで頭からせめつけられて教育せらるる生徒が卒業の後言語を以て人を感動せしむる如きことの出來ざるは論ずるまでもなく、甚しきは日常應接の言語すら完全に使用出來ざるもの多きは怪しむに足らざるなげ。吾人は敢て多辯ならしめよとはいはず、さりながら貴重なる天賦の思、を使用する練習を忽にして徒にこそけれの古文を弄し日常實際の應用に縁遠き虚飾の技藝に殆んど悉くの時間を空費するが如きは、まことに感心の出來ぬ次第といはざるを得ず、今少し、言語を自由に使用する練習は極めて必要なり。

讀書の習慣を養ふべし

西洋の婦人は我國の婦人に比べては、話方巧に且

つ話柄優なること屢々見聞する所なるが、其話方巧なるは一般の風習として、交際も廣く、話すことも幾重なるによるべく、其話柄優なるに至りては、世の中の知識多く禮節の心得も活きて働かざるに思はる、今談話をよくせんには、話方巧ならんよりは先づ話の料を豊かに有たんことの要あるべし。是れ世には随分饒舌家といふべき人も少からず、唯其話柄の面白からずとするもの多きを見て知るなり。而して話柄を豊かにせんには、常に書籍新聞雜誌等を讀むに如かず。由來我國人は一般に讀書の習慣に乏しく、書を讀むものは學校生徒の外またなきものと、人皆思へるが如し、世の中の時々の出來事も知らず打過ぐるもの少からず。昨年中我國に於て著しき事故にて東宮の御慶事、大阪のベスト、自由廢業、内閣の變更等を知らざるものはなかるべきも、其他の事に至りては誠にやしきものなり、外國に係はるるに至りては、北清事件は忘れたくとも、記憶に残れるなるべけれど、南

阿戦争は如何、佛國大博覽會は如何、米國大統領選舉は彼國に在りては牧童走卒も騒ぎ廻ることなるが、遂に勝を占め、再選の榮を得たるはマツキンレー知らざるものもあるならん。さるにては世の中は狭きものならずや、讀むべき文書少からず、これを讀む習慣を養ふべし。

立振舞の衝突

と題して、昨年十月發行の女學の枝折に左の如記したり。

今日の學校では體操科といふのがあつて、出来るだけ活潑な振舞

をさせることを稽古して居るやうである。この邊は女子の學校でも主意は變つたことはない筈で、若しも左様でなければ其の學校の體操は形のみあつて正味がな



間しいが、禮法では其の反對の方に中々八ケ間しいのである。一寸御覽よ、成るべく頸を上げ胸を反らして兩手を振りながら行進するのに、禮法では八ケ間しく頸を下目にし、上體を少しく傾け、兩手を膝の側方へ附けながら恐る／＼徐かに歩くのを勤める。それから行ずむときでも違ふ點がある。體操では兩足の踵を固く着けて足尖を六十度の角の潤さに開くのであるが、禮法では成るべく兩踵を着けずして兩足を相並行させるやうにする風があるのみか、自然女の容儀として兩足尖を兩方に傾けて、いはゆる内曲内股に歩く風がある。擧げ来れば此の様の衝突は澤山あるであらふ。是はたしてどちらが宜しいのであるかといふに、よく／＼考ふと、禮法で右のようにするは、畢竟、貴人の前ですることです。平生の場合では

何もこの様に窮屈さうにするには及ばないのである。即平生では自然の態度で宜しいのである。體操に於いても、實の處はそんなに窮屈ではなく、矢張りすべてが自然の儘なるを貴ぶのである。そこで見ると禮法と體操とは何も衝突することのないはずの、ものであらうと思はれる。どかく、禮法家は、古風のことばかり考へてゐるから、どうかすると窮屈に陥つて仕舞ふ所がある、貫いた禮法家は決して窮屈なこと許りは云はぬものである、又、上達した體操家も嚴格な風を吹かすことは、あまり、しない方で、つまり不自然を忌み嫌うのである。そうすると女子の立振舞に於て禮法と體操との衝突は必らずしも、心配する要はないものである、然し今日の禮法も今、少し今日に適する様に改良し、又體操も稍、自然に近つかん様に改良してもらひたいものである。

吾人も大體に於ては、至極、同意なり。時世のうつり變るに従ひ、日々の擧止、動作、應接等に至るま

で、よろづ、改まり行く今日、禮法のみ、やかましく古體のまゝを墨守して改良することなきは、まことに迂遠極まる話といふべし。抑々、禮法は、貴人の前にするを旨とするものとはいへ平生より心掛けて、禮法に従ひ立居振舞ふにあらざれば、其場にのぞみて、いざといふ時の間に合はぬものなれば、既に禮法をまなぶ以上は、日々其心得にて動作せざるべからず。かくては、今日、何れの點より考へても、衝突せでは已まじ吾人は此點より見て、今日の禮法に少からぬ改良を望むものなり

婦人の運動

近來婦人の運動、漸く盛となり、體育會には女子部を設けて女子の體操遊戲を講習することを始めしに昨今女子嗜輪會なるもの起りて婦人の自轉車乗用の奨勵を勉めつゝあり。やかましき婦人服装問題も、爾來は

必要に迫られて、自ら改良せらるゝに至らんか。

如是我聞

○教育上開拓せられずに放置せられた同様に残つて居る部分も、まだ随分多いだろうが、女子教育界なども或方面は確に未開墾の儘である。他の部分では、まだ着手は、しなくても、大抵働くべき方途は畧一定して居るが、女子教育界では殆ど混沌たる荒野を其儘に手も着けなければ方途も錯雜混亂で一向歸着する所を知らない様な短合に捨て置いて居る部面が多い。此方面から考へると女子教育界に於ては現在將來とも極めて有力な、活氣の満々たる、農夫を要することが頗る緊急な問題であるのであるが、悲



しい事には、そう云ふ様な人々には、容れられないのであるか、若くは働いたとて働かぬ甲斐がないと思ふのか、とんと奮發して自分から進んで女子教育界の未開墾地を耕作しにかゝらうとすることをしない。爲めに荒野

はいつまでも荒野の儘に残つて居て其耕作の仕方にも依然たる舊法を墨守して居る所が多いのはまことに残念でないか。世紀は進んでく、形式も多少は改まつてきた、が、精神は迄こまでも舊態であるア、我邦の婦人たちは迄こまでも不幸か知れない。いかに機械が備はつても運轉する人がなくては駄目だからねー。と、近來東京に出られた著名の教育家が其漆黒の鬚髯を撫して慨然として歎息した。○女學校に裁縫を課するにつきて、今日、もはや猶豫を唱へる女學校長はあるまい。然るに女子の本分たる

青兎につきての思想を普く發達普及せしめんとする企圖計劃に賛成しない女學校長があるから驚いた。茶の湯、生花の如きは單に修飾的技藝として餘暇あらば學ぶべしだ、最、必要だと稱する裁縫とても、尙人に托し得ることが出来る、皆共に絶對的必要とは稱すべからざるものである。青兎のことに至りては、事情が全く違ふ。女子の本分として決して他人に依托することなどは出来ない、國家消長の關する所で、近來の語で云へば、つまり國家問題である。我國今日の女子教育が頗る皮想浮華に流れつつある際、女子教育を経營する者は、須らく、大に此點に注目すべきである。と、語り終りて、意氣昂然たる教育者に出遇つた。

○娼妓の自由廢業は、我國に於て、近來未曾有の現象であつた。必死の力を之に盡したは第一に宗教家と多くの新聞社であるが、さて自由廢業をさせた其後始末は一體どうする積りなのか知らん、廢業娼妓の數はもはやおびたいしいもので、其多くは大抵待合の下女

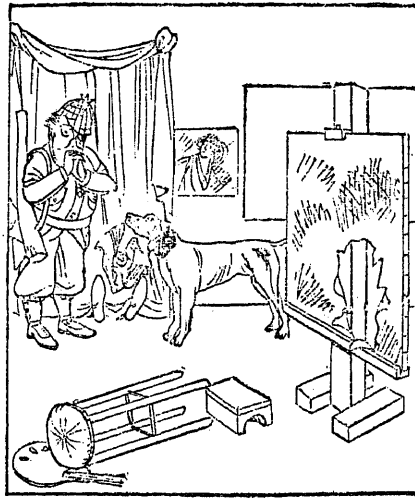
に入り込むといへば名前は一寸宜しい様なもの、詳細に其實をさぐればつまり公私を取り代へた結果となるまでいある。これでは、人權の上から見れば、とにかく、社會改良の上から見た時は、反つて病毒傳播を繁くするだけのことであつて、つまり、其する所は水排けも拵らへないで置いて、沼澤の泥濘汚水を無茶苦茶に大道へ酌み出したと同じことで、世間は、寧ろ汚水 汎濫に堪えない様になるではないか。こんな自由廢業のさせ方では、僕は甚だ不同意である。と、口角泡を飛ばした論客があつた。すると、或一人が側で聞いて居つて、無論、君のいはれる通り、今のやり方では不完全である、しかし、こゝまでやり通したのは大變な働さで、之から先きの排水は、其必要に應じて世の慈善家、ことに婦人問題に關した事であるから我が上流の貴婦人たちの慈善に仰がねばならぬと考へる。と熱心に論じて居られたのを聞いた。



表紙模様圖案

本紙の表紙圖案は當時の青年畫家の泰斗荒木十畝氏の考案に成れるものにて、母蘇に撫子は、母と兒に通せしめたるなり。母蘇の色なる橙色は、獨乙の詩人ゲーテ氏の色彩比象性 Symbolic に依れば溫暖にして快活なる趣あり、又豪然たる威嚴の徴となる、即明度に於ては黄色の次に位し、溫度に於て紅色の次に位す、明溫の度に於ては、又物理上にも然るなり、佛家は、又之を莊嚴の色とし、支那にては、陽性の色としゲーテ氏の説と同しく溫暖なる色、活氣の潜伏する形火の盛なる形又は情の烈しき形或は赫々たる威嚴の形とせり。

撫子の色なる白色は佛家にては、清淨潔白の色即大



日如來法界の色となす、大日如來法界は一切衆生の源にして白色も亦一切色彩の本源といふ意より出づるなり。支那の五行家は、之を義に配す、即、性質上、正直廉潔を意味す。我國にても儀式上に白衣白器を用ふるは清淨潔白の意味なるべし。

即白色は、未だ染習を受けざる色にして幼年者の、未だ染習を受けざるを顯はせるものなり。

地色 綠色は、ゲーテ氏は、靜にしてさはやかなる色、豊富なる色、凡て地上より繁く芽ぎすと云ふ如き者、又下に在て満足なる感とを與ふといひ、支那にても氏と同

とく、豊富なる色又溫和にして繁殖の趣ありとなし、五行家は、之を東方の色に配し、氣候よりいへば、春に適當す、稍黄に傾く緑は、いはゆる少年の氣を顯はすものなり。

而して、本誌題號「婦人と子ども」の字は本會々長たる高嶺女子高等師範學校長の揮毫になれるものなり

フレーベル氏の肖像につきて

「いざ、われ子どもと共に生を送らん、げに邦家の運命は婦人の手に係る」。これ實にフレーベル氏の口より傳へられたる千古の福音にして、如何に高尚微妙の思想情意が、此隻句の中に潜めるかは、言はずして明なり千七百八十二年より千八百五十二年に至る七十年間、全く人世の名譽榮華を外にして、幼童の保育と婦人の教育とに一身を捧げたる功績は、氏が幼稚園の鼻祖として、又女子教育の先驅者として、年を経るに従ひ氏の名と共に益々光明を増す。今卷首に氏の肖像を掲げて、親しく其溫容に接する思をなし、又其事績を紹介の考を興さんとす。



彙報



○婦人服裝の改良。我國婦人の服裝は、優美の點に於て多少優る所ありといへども、實際上に於て種々の決點あることは、一般識者の認むる所にして、過日弘田博士は、婦人衛生會に於て改良案を演説せられたるが、女子高等師範學校に於ても今回、更に委員を任命し衣服改良につきて調査せしむることになしたりといふ。尙改良衣服に付きて高木醫學博士は之れを一般の社會に實行することは六ヶしければ、先づ官立學校の女生徒だけにても實行せん希望にて、方今女子が幅廣帯及び長袖を廢し、上衣は穿袖と爲し、袴を穿たしむるは衛生上、經濟上及び作業上共に至大の便利を興ふものなりとの趣意にて、先き頃松田文相を訪ひ其意見を開陳せりといふ

○大日本婦人衛生會 昨年十二月例會を麴町區永田町